

～小さな発見が生まれる～ 下線部は小さな発見を豊かな経験につなぐ教師の援助

教師の意図的な環境構成

令和2年度までダンゴムシが園庭で見られなかった。そこで教師はプランターなどを使ってダンゴムシが棲み付くような環境を作った。さらに、幼児が親しみをもてるよう「ダンゴムシハウス」という表示も作り、園庭で遊ぶ中で、幼児の目に届く場に設定したり、提示したりしてきた。

4月

入園当初、A児は虫全般が苦手で、見付けると悲鳴をあげて逃げたり、近くで見ることを嫌がったりする姿が見られていた。

いろいろな虫に興味をもっているB児とC児が、ダンゴムシを砂場遊具の皿に乗せてじっくり観察していた。近くにいたA児も同じ場にやって来たが、皿を顔に近付けられると悲鳴をあげて嫌がっていた。しばらくするとB児とC児は、手に乗せてみたり、「歩いた！」「コロんってして～！」と、いろいろなダンゴムシの動きを言葉に出したりし始めた。教師も一緒にダンゴムシの動きを楽しんで見ていると、A児は教師や友達の様子をしばらく見ていた。そして教師や友達の言葉を聞いている内に、友達にしがみつきながらもダンゴムシに顔を近付けて見始めた。



【A児の小さな発見】

・A児にとって安心できる存在である教師と一緒に楽しんでダンゴムシを見たり、他児の楽しそうな姿を見たりしたこと、A児も気持ちが変化し、見始めた。

【B児・C児の小さな発見】

・ダンゴムシ特有の様々な動きに気付き、面白さを感じた。



6月 ～豊かな経験へ～経験の深まり

園庭で幼児がダンゴムシと繰り返し触れ合う姿を見て、教師はダンゴムシのダンスや表現遊びなどを保育に取り入れ、生活や遊びの中でも親しみをもてるようにした。すると、幼児がダンゴムシになったつもりで動くことを楽しむようになった。保育室内の自然コーナーにダンゴムシを入れた飼育ケースを置き、室内でも幼児が観察したり眺めたりして、安心できる環境を設定していたところ、遊びが見付からない幼児が、自然コーナーで落ち着いて過ごす姿が見られた。

6月のある日、幼児が登園時にダンゴムシを捕まえて幼稚園に持ってきた。教師がダンゴムシを大きめの箱に入れると、興味をもった幼児が集まって触ったり手に乗せたりし始めた。A児は横から様子を見ていたが、手に乗せる友達の姿を見るとそっと手を伸ばし、ダンゴムシの背中に触った。触ると丸まったダンゴムシを見て、「丸くなっちゃった！」と笑顔を見せた。「ダンゴムシにタッチできたね！やったね！」と教師が言うと、次は指でつまんで持ち、「見て！ダンゴムシ！」と言いながら、喜んで何度も教師に見せにきた。

その後、他の幼児が別の遊びに移ってもA児はずっとダンゴムシが入った箱の近くにいた。床に落ちてしまっていたダンゴムシを見付け、指でつまんで拾うと、「落ちてたの拾ってあげた！」「私が見付けたの！」と何度も嬉しそうに教師に伝えにきた。教師はA児の変容した姿を保護者にも伝え、A児の成長を共に喜んだ。

【豊かな経験】

・虫に触れたことがなかったり苦手だったりする幼児も、ダンスや表現を取り入れることで少しずつ親しみを感じた。

【A児の小さな発見】

・親しみをもっている教師や友達を楽しそうにダンゴムシに関わるのを見て、A児もダンゴムシに触ってみた。
・自分が触れたことでダンゴムシが丸くなったことを面白いと感じ、教師に伝えた。

【A児の豊かな経験】

・ダンゴムシに触れた喜びを教師に共感してもらい自信をもつとともに、体験からダンゴムシが怖くないと分かり、愛着をもって繰り返し触れることを楽しんだ。



【幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程で必要な教師の援助の工夫】

○一人ひとりのペースやタイミングを大切にすることで、幼児の自然と関わることへの意欲が高まる。

・教師は虫が苦手なA児に対して決して無理強いをせず、教師や友達が虫を見たり触ったりしている楽しそうな姿を見せる中で、興味・関心をもてるようにした。少しずつ自ら関わってみようという気持ちにつながった。

○教師が幼児の意欲の高まりや喜びを逃さずに共感したり認めたりすることで幼児の自信や成長につながる。

・長い期間を経て、徐々にダンゴムシを怖がらなくなり、最後には触ることができて喜びを感じた。それを教師に認められたことで自信となり、自分が体験して気付いたことを伝えたり、進んでダンゴムシに関わったりなどの成長につながった。